日本キリスト教会　広島長束教会だより

ミニバラ No.46

〒731-0135　広島市安佐南区長束 3-32-16

TEL/FAX
082-238-3459

2014 年 11 月発行

はかない人生

「木は切られても、また新芽を吹き、若枝の絶えることはない。」「だが、人間は死んで横たわる。息絶えれば、人はどこに行ってしまうのか。」

（ヨブ記 14 章 7 節、10 節）

これは、ヨブが人生のはかなさを嘆いた言葉で、そこに現われた思いはある程度の年を経た人なら大なり小なり、共通したものでありましょう。ただヨブは、幸せな境遇から突然神によって引きずりおろされたのですから、そこには深刻きわまる思いがあります。ヨブはその中にあって、自分の苦しみを、すべての人に共通する苦しみと重ね合わせて、語っているように思われます。

人間とはどうしようもないほど弱く、罪深い存在です。しかもその人生は短く、苦しみは絶えることがありません。私がテレビで女優さんを見て、「この人ずいぶん年を取ったなあ」と言ったら、妻に「あんたもね」と言われました。人生に華やかな時があったとしても、それは短い期間にすぎません。そして死んでしまえば、やがて自分が生きた痕跡も忘れられてしまうのです。

ヨブは神に向かって、「あなたが御目を開いて見ておられるのは、このような者なのです。このようなわたしをあなたに対して、裁きの座に引き出されるのですか」と叫びます。私たちは、たった一日の寿命しかないと言われるカゲロウのことなど気にかけません。そんな虫のことはどうでも良いからです。ヨブは、人間は弱い、はかない存在なのだから、神様はただ放っておけば良いではないですか、なのになぜ私に特別に目をつけて、これほど過酷な苦しみにあわせるのですか、どうか私にかまわないで下さい、と言いたいのです。

はかない人生を嘆く言葉は東洋にもたくさんありますね。日本には方丈記の「ゆく河のながれはたえずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたはかつきえかつむすびて、ひさしくとどまる事なし」というのが有名です。そこでは、水の上に浮かんでは消える泡が一人ひとりの人間に例えられています。しかし、聖書にあるのはそのような諦観の境地ではありません。人間ははかない人生を生きるように造られているのではありません。人間の持っている罪が人生をはかないものにするのです。

その時、ヨブは羨望の思いで木を見ていました。その理由とはまず、木は切られてもまた再生するからです。もちろん、それで木が本当に死んだわけではないのですが、ヨブはそこに、死んだ命が復活するというビジョンを見たのです。もう一つのことが、木は人間と違って罪を犯すことがないということです。人間は神から自由意志を与えられているので、良いことも悪いこともします。しかし木には自由意志などないので、罪を犯すことはなく、神から罪を問われることもありません。

ヨブは、木は切られてもまた芽を吹くのに、人間はなぜ生き返らないのかと考えました。人間以下の存在である植物を神は再生させます、復活させます。それなのに神が渾身の思いをこめて造った人間には希望はないのでしょうか。死がすべての終わりであるということにヨブはどうしても納得がいきません。そこで、そこから、死をこえる永遠の命を仰ぎ望むようになるのです。

もしも復活ということがなければ人生は無になってしまう、このことをおそらく一番最初に考えて口に出したのがヨブであったと思います。死によってすべてが無に帰してしまうかのような世界に、死を超えた命があるとき初めて、はかない人生は、明るく、希望に満ちたものへと変わる、これが聖書が語っているメッセージです。ヨブが苦しみの底から願ったことは、その後イエス・キリストによって実現されて、私たちの前にさしだされました。私たちがヨブのような苦しみを経ることなく復活の恵みに入れられていることを感謝します。イエス・キリストを信じる者は死んでも生きるのです。

（2014 年 9 月 28 日の礼拝説教より）

牧師　井上　豊